

堀内 勝*

Masaru HORIUCHI *



中世アラブのタルディッヤ（狩猟詩）

アブー・ヌワースの狩猟詩および「鷹狩」の二詩篇

On Zurraq and its Hunting Poems by Abuu Nuwaas

はじめに

狩猟詩はアラブ文学史の中でも、黄金時代であるウマイヤ朝、アッバース朝時代に盛んであった。狩猟詩の分野は、タルディッヤ (tardiyyah < tard = 追跡・狩猟) と用語化されている。動物を用いた狩猟詩では、狩猟犬、鷹、それにチーターが主たる描写対象であった。第2章に訳出する鷹狩詩二詩篇の作者は、8世紀末から9世紀初頭アッバース朝の黄金時代に活躍した詩人アブー・ヌワース Abuu Nuwaas al-Hasan ibn Haani' (813年頃歿) である。彼の詩作品は詩集としてまとめられており、『アブー・ヌワース詩集』Diiwaan Abii Nuwaas として、幾つかの編纂がある。本稿ではガザーリー (al-Ghazaalii, Ahmad "Abdulmajiid) 編のバイルート版(1953)に依った。まず第1章ではアブー・ヌワースの狩猟詩についてその一端を述べ、次に本稿の主題であるズラク鷹について言及しておきたい。第2章ではズラク鷹を使つての実猟を描写したアブー・ヌワースの鷹狩詩二詩篇を訳出・解説してゆく。最後に記述の多い鷹類の「鉤爪」について日亜資料に基づいて一言しておく。

第1章 アブー・ヌワースのタルディッヤ（狩猟詩）について

第1節 アブー・ヌワースのタルディッヤ（狩猟詩）について

このガザーリー編バイルート版のアブー・ヌワース詩集においては、タルディッヤ(狩猟詩)として baabu t-tard (狩猟の章) に集められている。その前の章は baabu l-"itaab (悔悛の章) の宗教詩が収められ、その後の章は baqiyyah baabi l-xamriyyaat wal-ghazal (酒ほがい詩と恋愛詩の章の補遺) である。後者は、その章題で明らかのように巻末に来る終章である。「狩猟の章」は従って主題別で言うと、最後を飾るものといえる。624頁から672頁までの48頁を占め、長短52篇からなる。狩猟が主題となっているものを順次集めたに過ぎず、詩篇の内容を狩猟主体とか獲物別とかの吟味した上で、というわけでは無い。従って狩猟に用いられる動物達、狩猟対象となる動物達が描写される場合、別のバーブ(章)、例えば「ワスフ(baabu al-wasf 叙景の章)に分類されることも十分考えられる。というのも評者によって、好みや強調、力点、評価部分が異なっており、特に動物描写の場合がそうである。牧民出のアラブにとっては、その好みの多層性から評価基準もそれなりの説得力を伴って

* 中部大学国際関係学部国際文化学科

おり、その紛らわしさは必然とも言える。そのあたり編者ガザーリーも承知しているようで、「狩猟の章」で52篇まとめるにあたって、「ラーウィー(伝承者)達の情報ではアブー・ヌワースは29篇のウルジュザ(ラジャズ調の短詩)、4篇のカスィーダ(長詩)を残している」と注書きしている(同書624頁)。筆者が既に訳出、考察済みの「目元涼しきズラク鷹」(第2節参照)からして、ガザーリー編では選外となっている。

以下に筆者なりにガザーリー編バイルート版のアブー・ヌワース詩集のタルディッヤ(狩猟詩)に分類される52篇を振り分けてみた。章題を訳し、おおよその内容を読み取り、狩猟用動物が何であるかを分類基準とした。「～～狩」といった場合、2種あり、「鷹狩り」のように狩猟する側 *saa'id* (hunting) と、「猪狩り」のように狩猟される側 *sa'iid*, *maṣ'uud* (hunted) とがあり、それがまた<狩猟>と振り分けられるか否かを紛らわせることになるのであるが、「～～狩」と限って言った場合、狩る方か、狩られる方か、狩猟獣や猛禽類の描写なのか、といった点は、いずれの世界もそれは共通するようだ。

ガザーリー編も以下に見るように、カリフや太守といった宮殿内で飼育されている「闘鶏」を主題としたもの、馬を用いた狩猟を主題としたものもある。さらには普通の弓矢の他に、石弓(*qaws al-bunduq*)や疑似ブーメラシ(*shiqqah*)などの飛び道具を用いての狩猟詩もある。しかし矢張り猟犬を謳ったものが一番多い。全体の半数以上の28篇を占める。現在でもその美しく優雅な姿と、走りの早さと素晴らしさから人気のあるサルキー犬、それを思い描いても叙景を再現できよう。鷹狩に関しては本稿のガザーリー編では18篇が集められている。鷹も種類が多く、また時期によつての使い分けもあることであり、猟犬に負けないワスフ(*wasf* 描写)が次々と繰り広げられて行く。なお、飛び道具の使用人、即ち弓手、射手、槍投げなどでナージュ *naazi* (例として詩集、p.668)という語が用いられることがある。主動作の直前の動作を言ったもので特徴がある。わが国では「投げる、放つ」など<対象物への働きかけ>が概念となろうが、アラブ人は「胸から手を出す、矢を番える、道具を揃える」などの準備段階を指示する意味

アブー・ヌワースのタルディッヤ(*tardiyyah* 狩猟詩)の内訳:

狩猟主体	詩題(邦訳)	脚韻文字(囲み記号)	収録頁
鷹	al-baajii wa-l- <u>hubaaraa</u> (オオタカとホバーラー=野雁)	malhuu <u>ḥ</u>	666
	qabla s- <u>sabaah</u> (朝明くる前に)	dujjaj	664
	al- <u>suquur</u> l-lumma <u>ḥ</u> (目の鋭きセーカー隼たち)	al-mu <u>ṭ</u> ri <u>ḥ</u>	648
	zurraq sa <u>bi</u> i <u>ḥ</u> (羽色美しズラク鷹)	sa <u>ri</u> i <u>ḥ</u> i	651
	al-baazii (オオタカ)	asfa <u>ṭ</u> aa	650
	ḥamaam ya“fuur (カモシカバト)	al-tuyuu <u>ṭ</u> i	655

	waqaa'ī l-karaaki (鶴を仕留める)	al-sha "ḥi 658
	al-faxx (仕掛け罠)	yanqaḥaa 661
	wasf zurraq (ズック鷹を叙す)	al-tiraaḥi 648
	saqr (セーカー隼)	al-laamiḥi 661
	saa'id l-hubaaraa (ホバーラー狩)	al-naḥi 663
	baazi waasi l-qamiis (翼広きオオタカ)	l-qamiis 647
	al-saqr (セーカー隼)	al-xasaa'ḥi 642
	al-yu'yu' (小チョウゲンボウ)	bi-sḥi-hi 669
	hiraab fii quffaaz (^{えがけ} 轆に収まる槍)	al-munaadiḥaa 670
	al-yu'yu' (小チョウゲンボウ)	"alaamataaḥu 654
獵犬	sawt "adhaab (懲らしめの鞭)	waraaḥi-hi p.639
	kalbun yaxruju min ihaabi-hi (生皮から出て来た獵犬)	jalbaaḥi-hi 631
	kalbii ma"ii (獵犬と共に)	sḥbii 632
	kalbun waththaabun (跳躍する獵犬)	b-s-sabiiḥ 640
	kilaabun mu'addabah (調教済の獵犬達)	al-muttanaḥi 634
	rithaa'u kalbin (獵犬の引い)	al-"iqaaḥ 643
	naazaltu "usma l-wahsh (荒廃した遺跡に降り立ちぬ)	al-nuquḥ 645
	kilaabun ghurru l-wujuuh (顔に白星持つ獵犬たち)	lughaaḥi-haa 628
	kalbun yutiyrū fi l-jaww (空中を飛ぶ獵犬)	siraaḥi 637
	nasiijun wahdu-hu (唯一無比、無敵な奴)	bi-jaddi-hi 624
	laa xayra fi th-tha"lab (狐に良きこと無し)	sighaaḥi-h 629
	zunbuur (獵犬名；スズメバチ)	al-suyuuḥaa 633
	kalbun ka-anna-hu sahm (矢の如き獵犬)	al-tabaashiiḥu 635

	al-lahb al-murtajj (揺れる火炎)	yadh ^{hi} ru-hu	660
	kalbun agh ^d af (垂れ耳の獵犬)	shiwa ^{ti} -hi	638
	al-kalb ni [‘] mu l-axi l-mawaasii (獵犬、この四足の良き友かな)	al-ra [‘] si	642
	kalbun aṭlas (黒毛の獵犬)	tanaffa ^ṣ aa	644
	al-dummar al-ximaas (飢えた瘦身の獵犬)	dila ^a si	641
	buurika kalban (獵犬に祝福あれ)	wabi ⁱ ḡaa	642
	kalbun ka-s-ṣaqr (セーカー隼の如き獵犬)	is [‘] aa ^{ti} -hi	625
	kalbun najiib (高貴なる獵犬)	maq ^ṭ aa	627
	kalbun fazz (粗暴なる獵犬)	talaz ^z aa	641
	kalbun saluukii (サルーキー獵犬)	al- [‘] uruu ^{qi}	624
	yad [‘] uu ila s-ṣayd (狩への招待)	at-tur ^q	638
	wa-taalamaa wa-taalamaa wa-taalaa (何時までも 末長く)	ta ^a laa	634
	kalbun ka-l-baṭal (武者の如き獵犬)	ka-l-ba ^ṭ al	644
	akrim bi-haadhaa l-kalb (この獵犬を讀えよ)	ahwa ^a li	646
	kalbun saahim (瘦せ獵犬)	zala ^a mi-hi	636
チーター	fahdun waad ^{ih} (明るい肌色のチーター)	war ^{di} -hi	649
	fahdun (チーター)	taqa ^d di	662
馬	was ^f u faras (馬の描写)	xida ^a bi-hi	657
	farasun mayyaalu l- [‘] udhar (^{たてがみ} 鬣 傾ける馬)	al-saha ^a	646
飛び道具	banaadiq (砲弾=石弓)	istimlaa [‘] i-haa	668
	asad qaani ^s (^{かりうど} 狩人ライオン)	qati ⁱ mi	653
闘鶏	diikun aḥsan min taawuus (クジャクより良い闘鶏)	al-mah ^{di} yy	659
	diikun hindiyy (インド鶏=七面鳥)	ja ^d di	645

n. 各詩篇の順序は、アラブ詩の伝統にのっとり脚韻単語 (qaafiyah) の脚韻文字に基づき、そのアルファベット順として配列した。

場を持っていることは強調されねばならない。これは狩猟対象が、バスマラを唱えて射放てば、その時点でハラール(許法、可食)とされる概念と基を一にする。あるいは一連の動作の始動部が主たる動作の全体の意味となる、と言った方がよいか。ジビエ(狩猟鳥獣)の食肉が、イスラム法と抵触する〈血抜き〉〈死肉〉が重大なテーマとなるからである。

第2節 ズッラク鷹について

第2章で訳出紹介する鷹狩詩2詩篇は、いずれもズッラク鷹およびその狩について扱われる。第1節で紹介した『アブー・ヌワース詩集』Diiwaan Abii Nuwaas のタルディッヤ (tardiyyah 狩猟詩) 52詩篇のうち、ズッラク鷹の2詩篇である。この2詩篇は上述の一覧でいえば、第9番目原題「ズッラク鷹を叙す (wasf zurraq)」(同書p.648)、次に第4番目「羽色美しきズッラク鷹 (zurraq sabiih)」(同書p.651) である。しかしアブー・ヌワースの作したズッラク鷹の詩篇はこれだけではない。ガザーリー編バイルート版の詩集には収録されてはいないが、ズッラク鷹を叙したアブー・ヌワースの作詞になる他の詩篇が伝わっている。従ってアブー・ヌワースは都合3篇のズッラク鷹を叙した詩篇を残したことになる。このガザーリー編バイルート版に未収録のズッラク鷹の詩篇に関しては、動物誌関係の資料に収集されている。こちらの第3のズッラク鷹詩篇に関しては、すでに筆者は紹介している；「アラブ詩の律格型ラジャズについて」と題しその第5節「ラジャズ格の一例」としてアブー・ヌワースのズッラク鷹を叙したウルジューズ9詩行を訳出、分析を行った『詩的ディスクール』(白鳳社 1993、pp.141～172)。その詩篇の題は付されていないので、その内容から

今「目元涼しきズッラク鷹」との仮題を付して本稿を進めて行く。

この「目元涼しきズッラク鷹」の記述も含めて、ズッラク鷹の説明をしておく。ターセル (tiercel 狩猟用鷹) としては大別してハイタカ系、ハヤブサ系とあり、多種にわたって存在するが、ズッラク鷹はその前者に属していることは間違いない。

「オオタカ (baazii) は猛禽類の王様である。ハヤブサ (shaahiin)、セーカー隼 (saqr)、ズッラク、チョウゲンボウ (yu'yu') の順である」と、既に9世紀に『動物の書』Kitaab al-Hayawaan を書いたジャーヒズ al-Jaahiz (西暦868年歿) が述べている(同書VI478)。身体の大きさから順に列挙している感もあるがズッラクの相対的大きさがこれで分ろう。

動物学に詳しい14世紀の学者ダミーリー al-Damiirii (1405年歿) は「狩猟用に用いられる鷹で、大きさはオオタカ baazii とハイタカ baashaq の中間。別説では白オオタカ al-baazii al-abyad との説も。複数形はザラーリーク zaraariiq。オオタカの類ではあるが、それよりも性質が繊細 (laṭiif) である。但し4体質 (mazaaj) においては暑 (aharr) にして乾 (abyas)。(これは四元素の「火」の性質に相当する) この性質及び体質故に、羽翼 (jinaah) がより強力であり、飛行においてはより俊敏であり、かつ攻撃においてはより激しくなる。しかし同時に欺瞞 (xatl) と邪悪さ (xubth) の性質も持ち合わせている。最良の色は背中が黒、胸が白、目が赤いもの。(『動物誌 Hayaat al-Hayawaan』II 9)

このことからズッラク鷹は先ずハヤブサ類ではないこと、ハイタカ類の一種であることが明瞭になった。ズッラク鷹とは大別して3説ある。

①白オオタカ説、②雄のオオタカ説、③カタグ

ロトビ説である。

1 白オオタカ説: ズッラク鷹とは、バージー(オオタカ *baazii*)とバーシャク(ハイタカ *baashaq*) との中間の大きさのタカである、と言われている。この中間種にいろいろ当たってみたが、白オオタカ (*baazii abyad*) との主張もある。ダミーリーの記述の中に、「別説では白オオタカ *al-baazii al-abyad* との説も」とあった。たしかにズッラク鷹の原語 *zurraq* の語源 $\sqrt{z/t/q}$ は「青色」の意味が基本であり、青には白に近い灰色がかった場合も含まれている、そのため「白オオタカ」の推定も可能であろう。ズッラク鷹は別名サクル・アブヤド (*saqr abyad* 白セーカー) とか、サクル・アブヤド (*saqr abyad al-ra's* 白頭セーカー) ともされており、サクルとするのは余程オオタカ類とハヤブサ類との類別を知らないか、セーカーをタカ類の代表として、その区別を中和しているか、としか解し得ない。しかしそれはともかくとして、現今の「白オオタカ」を対象とすると受け入れがたい。というのは白オオタカは、普通サイズではオオタカより一回り大柄であり、また体重においてもオオタカが大約1000グラムに対して1500グラムを超えるのは間違いない。しかもアラブ世界から見れば、生息地ははるかに北方であり、熱く乾燥したアラブ世界では、詩中に叙しているような血統を維持し、繁殖飼育し、鷹狩用に調教するのは、中世の当時のことを考えれば不可能なことである。

2 雄のオオタカ説: 全体的記述から「雄のオオタカ」ではないか、という想定が成り立つ。体型に関して言えば、「大きさはオオタカ *baazii* とハイタカ *baashaq* の中間」と言っている。オオタカの雄は雌に比して三分の二ほど

しかない小型である。それゆえわが国ではオオタカの雌雄を指示する時、兄弟で表わす習慣を持っている。雌は体型が大きいので「大」を兼ねた意味で「弟^{だい}」と言っており、一方雄の方は「小」を兼ねた意味で「兄^{しょう}」と言っている。雌はダイダカ。雄はショウダカというわけである。「雄のオオタカ」説が先ず挙がるのは、性質が上述のズッラク鷹とよく類似しており、「同時に欺瞞 (*xatl*) と邪悪さ (*xubth*) の性質も持ち合わせている」点、雄は従順で無く、飽きっぽい点が欠点として指摘されており、雌の方が使いやすかった。しかし使いこなされた雄は逆に「羽翼 (*jinaah*) がより強力であり、飛行においてはより俊敏であり、かつ攻撃においてはより激しくなる」といえるからである。

それに雌雄が別称で呼ばれることは、これほど鷹術が進んで、鷹類を承知している我が



図1 カタグロトビ

欧名 *Elanus caeruleus*
 亜名 *al-Hid' al-Aswad al-Jinaah*
 出典『オマーンの鳥類』Tuyuur al-“Umaan, London, 1985. p.83

国でもハイタカ（鵟）に関しては雄はコノリ（兄鵟）と言ったし、ツミ（雀鷹）の雄はエッサイ（悦哉）と呼んで、別種の鷹と理解していたと考えられている。アラブ・イスラム世界でもこうした面は十分考えられることであり、訳出した詩中においても第1詩篇の最終詩行において、「オオタカの息子 *ibn baajii*」と記述されている個所などは、オオタカの雄であることを十分窺わせるところである。

また「雄」の性質であるが、従順で無く、訓教してもすぐに忘れ、全く予想外の行動を採ることが多い。そのため使いこなすのも、雌より難しいとされるのが、一般である。そのあたりをダミーリーは、「4体質においては暑にして乾。…しかし同時に欺瞞と邪悪さの性質も持ち合わせている」と言っているのであろう。

- 3 カタグロトビ説：大きさから言っても、詩中の描写からしても、このカタグロトビ説が一番当たっていよう。現今ではクーヒー (*kuuhii*)、またはクーヒッヤ (*kuuhiyyah*) と呼ばれているものである。あるいは西欧語 *Black shouldered kite* をそのまま *al-hid'ah al-sawdaa' al-katf* (黒い肩のトビ)、あるいは *al-hid'ah al-aswad al-jinaah* (黒い翼のトビ) との名称を受け入れている。

トビ(鷹)といっても、わが国の見慣れたものと異なり、タカに近い形態であり、頭が大きい分、ずんぐりしておりフクロウ類の形態にも近い。カタグロトビ類は *Elanus* という亜科であり、普通のトビ類は *Milvus* という亜科であるので、その点でも「トビ」とのイメージとは乖離させておいた方がよい。わが国には南の沖縄辺りに迷鳥として時折報告されるだけで、全く馴染みが無い。ましては *Elanus*

は4種しか属しない数少ないタカである。しかも *Elanus* を調べると、カタグロトビ *Elanus caeruleus* が出て来るほどである。即ち *Elanus* 属、その代表となっているのはこのカタグロトビである。英名は *Black shouldered kite* または *Black winged kite* である。後者の英名からハグロトビ(羽黒鷹)の和名を持つ。上述したダミーリーの最後の記述で「最良の色は背中が黒、胸が白、目が赤いもの」と述べている。「背中が黒」とある。原文も *zahr* と筆者は確認しており、「背中」である。この部分は、肩 (*katf*) または翼 (*jinaah*) とした方が相応しかろう。全体が灰白色の中で、肩の翼部が黒色であるのは、非常に目立って、この鷹の識別を容易にしている。(図1参照)

もう一つこの鷹の際立った特徴は目の虹彩 (*qazahiyyah*) が赤いことである。回りがアイシャドーしたように黒縁^{くろふち}した中に、赤目が爛々と輝く。その血走った眼で見据えられると、それだけで射すくめられてしまうほど異様なのである。ズッラク鷹の愛好者は、これを瑞々しさ、潤い、冷涼さ、水仙の様と捉える。

一方ジャーヒズは、動物の目の色の考察の中でズッラク鷹の目は黄金色 (*‘uyuun dhahabiyyah*) だとしている(『動物の書』VI 229)。いずれにしても、目の色でも区別ができ、ハヤブサ類の目は「黒眼」一色なのに対して、ハイタカ類のそれは「黄金色」であり、年をとるとともに黄金色から赤色に変わって行く、即ち狩に習熟した「最良の色は目が赤いもの」なのである。カタグロトビの目の色は、生れた時から赤目であるものの方が多い。但し、ズッラクをカタグロトビと同定するのに差し支える最大の難点は常習とする食性である。爬虫類、両生類、小型哺乳類など雑食で

あって、鳥類を捕食するとしても小鳥類であることである。大物捕りは網懸^{あがけ}では無理であって、巢鷹のものを相応に調教されて仕立て上げられるのであるが。

ズラク鷹に関してジャーヒズは面白い記述を行っている。2点を紹介しておこう。「フバーラーはズラク鷹に対しては、その糞便で対抗する」(『動物の書』VI478)。即ち、バージー(雌オオタカ)は自分より大型のフバーラー(hubaaraa 野雁)に向かって獲物として仕留める。しかしズラク鷹は一回り小型なので、はるかに大きいフバーラーは、向かって来たこの敵に対しては、後ろを向いて糞便(salh)を引っ掛けて対抗する。引っ掛けられた糞便は、ズラク鷹にとっては、眼潰しされることにもなるし、翼羽や足はぬるぬるとして飛行の自由を奪われる。また最大の武器である脚爪も滑りやすくなって、まともな「驚掴み」が出来なくなるし、ましては切り裂く武器としても役立たなくなるからである。

もう一点は、「動物同士の敵愾心、天性的に忌避し合うもの」として、狐とズラク鷹とを挙げている。鳥と獣の間、しかも猛禽類の中でも、特にズラク鷹としている点、興味深い。理由としては、狐は鳥類の中でも4体質においては「暑ahraar」の体質のものに対しては、対抗できないこと、さらに肉食として捕獲する獲物の食領域が同じで、奪い合いを行うから、と指摘している。(『動物の書』II52)。

次章の第1詩篇でズラク鷹の名産地が出て来て、興味が惹かれる。二詩行目「この一品ナアマーン・サフラダーズにて捕獲せしもの」と謳われるぐらいであるから、明らかにその手掛かりを与えてくれる。ナアマーン・サフラダー

ズ Na“amaan Sahradaaz は、この類の地誌に詳しいヤークト Yaaquut (1229没)の Mu“jam al-Buldaan『地理学大全』にも記載が無い。他の資料に当たっても、具体的に何処なのか定かでない。本詩の注釈者 al-Ghazaalii も「ism mawdi“(地名)」としているだけで、なんの補注もない。地名の語形態からしてアラブ世界ではなく、ペルシャから北方の地名であろう。『翼広きオオタカ』の詩篇(p.647)の方ではもう一つ名産地としてザート・ル・イース Dhaatu l-“Iis が記載されている。こちらはオオタカの方であるが、編者による地名の同定ができておらず「場所名 ism mawdi“」とあるだけである。

鷹類は北方ほど気候が寒い関係もあって、大型の良品が多く、名産地も集中する。わが国でも東北地方を中心に名産地が多く、徳川時代には、そうした地域では鷹の巣が見出されると、巢山として特別地に指定し、一般人の出入りを禁止する地域もあった。そしてこれを保護して見回り役まで置いた。毎年10月から11月にかけて幕府に進献する風習すらあった(『放鷹』120～128)。

アラブ世界の鷹狩りも十字軍の時代(11～13世紀)、随分様変わりをした。イスラム側も十字軍から絶えず攻撃を受けていたわけではない。休戦状態や友好的状態も時々であった。そうした折など、一緒に鷹狩も行ったのである。こうした交流を通して、アラブの進んだ鷹狩文化が西欧に伝わり、その発展に貢献した。そして同時に西欧から北方世界に在った優れた大型の鷹が移入され、その鷹術がさらに高められたのである。

第2章 2詩篇のズラク鷹のタルディッヤ(狩獵詩)

さて以下に2詩篇のズラク鷹を謳ったタルディッヤ(狩獵詩)を紹介する。1詩篇目は「武者震い」、2詩篇目は「50羽捕り」と題名を付して述べて行く。1詩篇目の原題は *wasf zurraq* であるから、訳せば「ズラク鷹の叙述」ということになる。「武者震い」と名付けたのは、4詩行目に「その綽名も好し「武者震い」」とあるからである。名前のついた鷹が紹介される例もまた少ない。2詩篇目の原題は *zurraq sabihh* と言う。

第1詩篇 3詩行目：

(一旦その手から飛び立たば)多くの、何と多くの(素早き)水鳥を捕えたことか

fa-kam wa-kam min tuwwalin jammaazi

第2詩篇 6詩行目：

何と なんと多くの水鳥 上を見上げ逃げんとせしか

fa-kam wa-kam min tuwwalin tamuuh

ローマ字綴りの原詩2詩行を見較べて頂きたい。異なるのは最後の脚韻語となる一語のみである。韻に合わせるべく語句選びに呻吟したと読み解くべきか。

さて今回のズラク鷹の狩獵対象はいずれも水鳥 *tuwwal* である。*tuwwal* とは、注釈者によれば「*taa'ir al-maa'* (水禽)」とあるのみ。どの種の水鳥かは同定されてはいないが、*tuwwal* の語根義<長い>からして、鴨、鷺や鶴類の「頭首が長い水鳥」か「脚が長い水鳥」であろうと解し得る。「背高鳴」と同定するのが有力である。背高鳴は Black-winged Stilt、学名 *Himantopus himantopus*。長い赤味がかった脚が目立ち、頭から背中が黒く、胸腹が白い。嘴も長く真つすぐ伸びる。世界中の熱帯から温帯にかけて棲息。海辺から川辺、田、池などに見られる。ここではチグリス河が特別の保護区でのことであろうと推察される。

訳せば「羽色美しズラク鷹」となろう。しかし最終行で「仕留めし獲物何と50羽」とあるところから「50羽捕り」と名付けた。

近似した内容になっているので、あるいは同時に詩作品として推敲し、結果的に別の詩篇とした可能性もある。あるいは共に同じ *tuwwal* という水鳥猟なので、別の出猟であっても似通った内容となってしまった可能性も残す。両詩篇には近似した技法が見られるのも、推敲の途中であったか。

第1節 第1詩篇 鷹狩詩「武者震い」

原題：*Wasf zurraq*(ズラク鷹を叙す)

以下の「武者震い」と称する鷹狩詩は8行詩で構成される。第1詩行では「血統高く」と、第4詩行では「敵大きくとも敢然と立ち向かう」とあるから、<巢鷹>であって、<大物捕り>用に訓育されていることが分る。野生で<網懸^{あがけ}>の鷹は、自分より大きな獲物に対してはその怖さを体験的に知っており襲うことは無い。しかし鷹舎で飼われている鷹は一品であり、血筋も明らかになっており、怖さ知らずに育てあげられる。鶴や青鷺、コウノトリなどの大物であっても、敢然と襲いかかる。大物であるため尻など

に掴みかかれれば振り回され、嘴で突かれ、むしろ鷹の方が一命を落としかねない。予め捕獲しておいた本物を用いて、何処を如何襲い掛かるかを特別に調教されるのである。前半で鷹「武者震い」の全体像を叙述した後、後半は実際に狩の場面を描写する。「武者震い」の襲う瞬間の俊敏な動き、そしてその研ぎ澄まされた鉤爪の一閃…

詩篇の形式について述べておく。8行詩で構成される、とほいうものの形式で言うと、一行の半分、即ち半詩行が独立しており、前半詩行・後半詩行で成立している巧緻さを見せている。

しかも意味内容はなんら中断されることは無く、滑らかに連続しており、半詩行が独立している風には思えない。半詩行の末語はすべて脚韻を踏む [-aazi]。それ故半詩行すべて独立した16詩行のザーイッヤ(Zaa'iyah ザー文字脚韻詩)と称し得よう。脚韻に関して、本作品は見事の統一を見ている。以下の第1節では韻律にも配慮して、和訳及びアラビア語のローマナイズ原綴を半詩行づつ一行とした体裁を採った。これにより、視覚から容易に確認が出来るはずである。律格型は、狩猟詩の殆どすべてにあてはまるが、長長短長拍のラジャズ(rajaz)形式である。

1-1 邦訳と原綴(ローマナイズ)

1. 明けやらぬ早朝鷹狩に出る 手に据えたは鉤爪鋭きズラク

血統高く 翼またその羽柔軟にて付け根まで見事な造形^{つくり}

qad aghtadhii bi-zurraqin juraazi

mahdin raqqi z-ziffi wa-t-tiraazi

2. この一品 ナアマーン・サフラダーズにて捕獲せしもの

獲物狩りては美味き食料もたらす、一旦手元離れなば

dubbiqa min Na'amaana Sahradaazi

taṣayyada-naa rizqan wa-dastaxaazi

3. 手に据えなば その持ち主の拳と手袋を飾る

多くの、何と多くの素早き水鳥を捕えたことか 一旦主人の手から飛び立たば

zaynu yadi l-ḥamili wal-quffaazi

fa-kam wa-kam min tuwwalin jammaazi

4. 敵大きくとも敢然と立ち向かう その綽名も好し「武者震い」!

格闘が水中に及ぶも数多^{あまた}たび その動きの俊敏^{はや}きことこの上無し

mughaamirin yuknaa abaa kuzzaazi

jammu l-wiqaa'i muwjazi l-'iyaazi

5. 守りの難き獲物に対しても 何と多く狩の場と定めたことか

掴み上げては運び去る 障害物とて無い広大な原野へと

qad taalamaa awṭana b-l-ahraazi

“allaqa-hu bi-l-jadjadi l-biraazi

6. 電光石火の早業 獲物の急所横切る
 狙い違わぬ曲がり刃の鋭き一閃
 mashqan yuqiddu thabaja l-ajwaazi
 bi-hujnaati sudfati t-tawxaazi
7. 靴直し屋の研ぎ澄まされた突き^{ぎり}鉋さながらに
 加勢も要せずと一騎当千 視線定めてまっしぐら
 mithla ashaafi s-sani'i l-xarraazi
 ya-taamu-haa fardan bi-laa jilwaazi
8. 鷹の息子 見事その本領發揮して鷹の職分果たしたり
 何とこよなき友なるかな 食糧^{まきか}難の時ぞ助け手なる
 qadda bni baazin wa-sanii'u baazi
 ni-ma l-xaliilu saa-ata l-i-waazi

1-2 第1詩篇

第1詩行：

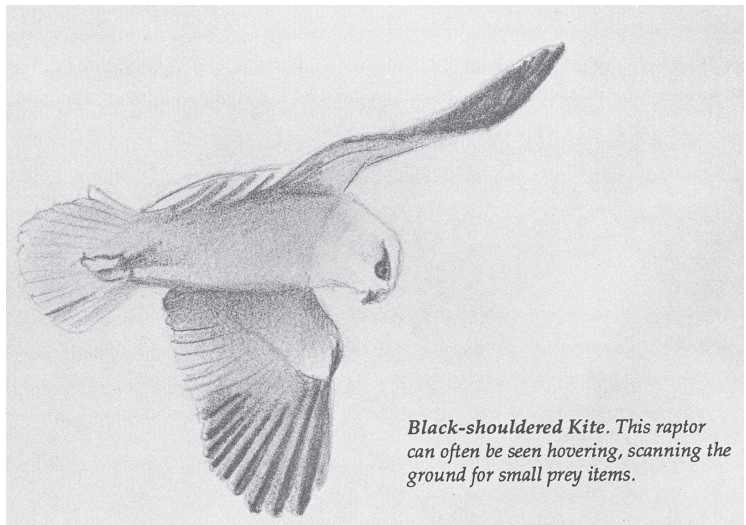
前半詩行；aghtadhii の/dh/は誤植で、正しくは/d/である。タカ狩りに出る時の定句である。その原語 aghtadii の直義は、「私はグドゥワ ghudwah の時間帯に〜する」となる。グドゥワの時間帯とは、「早朝、夜明けと日の出との間の時間」を指す。ガダー ghadaah とも言う。朝早い出立であるのは、動物の行動が早朝であり、狩に絶好であるからである。

juraazi < juraaz は多くある「刀剣」の語彙の一つ。「刃の鋭い剣」の義で、ここでは「鉤爪」の換喩である。この「鉤爪」は次作品では第8詩行で、「その鋭き致命的槍で」 binayzakin madhruuhi と叙されている。

後半詩行；mahdin < mahd 「血統高く」は次作

第1詩行目にも再出されている。ziffi < ziff は「駝鳥羽のような柔らかい小さな羽、鳥類の小羽」であるが、注釈者 al-Ghazaalii は al-riish (翼) としているのでそれに従った。

tiraazi < tiraaz は「衣類や装飾品に用いられる刺繍や縫い取り」の意味だが、al-Ghazaalii は asl al-riish (翼の根元、付け根) と



Black-shouldered Kite. This raptor can often be seen hovering, scanning the ground for small prey items.

図2

Richard Hoath, Natural Selections A Year of Egypt's Wildlife, The American University in Cairo Press(Egypt), 1992, p.151

注釈している。

第2詩行：

前半詩行；dubbiqa は動詞 dabbāqa の受身形。dabbāqa の語根は dibq (鳥糞) である。即ち「鳥糞で鳥などを捕える」。わが国では鳥糞で雀や小鳥を捕えることは古くから行われていたし、鳥差し等の専門職も存在した。しかし鷹類のような大型の野禽を鳥糞で捉えられるとは想像しがたい。アラブの鳥糞はそれほど粘着力があったものか。むしろ単に「捕獲する」意味で用いられていると解釈した方が妥当であろう。

ナアマーン・サフラダーズ Na‘amaana Sahradaazi は、ズラク鷹の名産地であることが示されている。しかし具体的に何処なのか定かでない。注釈者 al-Ghazaali も「ism mawdi‘ (地名)」としているだけで、なんの補注もない。

後半詩行；「美味き食料」と訳した rizqan < rizq は益ある「食料」となろうか。鷹類の獲物となる雁、鴨類などの水鳥やシャコやヤマウズラなどの重禽類は、人間にとっても美味な肉類である。

dastaxaazi < dastaxaaz、この語は大辞典である Lisaan al-Arab にも記載されておらず、またペルシャ語起源の語彙に詳しい Steingass の Arabic-English Dictionary にも項目が無い。語形態からして明らかにアラビア語ではなく、恐らくペルシャ語かトルコ語系の借用であって、鷹狩用語の「鷹匠」の隠語の可能性がある。注釈者 al-Ghazaali は「一旦獲物を目にすると、その手から鷹を飛び立たせる者」とある。

第3詩行：

前半詩行；zaynu yadi l-ḥaamili の直義は、「運

ぶ人の手の飾り」。鷹を手にとると、恰もトロフィーを手にしたように、誇り高く、高揚感を湧き立たせる。ここではそれを「飾り zayn」と捉えている。

quffaazi < quffaaz クッファーズとは「手袋」の一般義であるが、ここでは鷹を握える時、その鋭い鉤爪から拳を保護するために「長めで柔らかい革製の手袋」のこと。複数形は qafaafiiz。わが国の鷹狩り用語では^{えがけ}鞆に当たる。クッファーズについては、第1章のアブー・ヌワース狩猟詩一覧の中で、第15番目のタカ狩詩篇の表題 hiraab fii quffaaz 「鞆に収まる槍」にもなっているし、またその第7詩行目にも叙されている。アラブ世界の鷹狩りにはもう一つ簡便な手袋代わりになる道具がある。指の部分を作らず、そのまま寸胴伸ししたもので、円筒形に製して手に通し先端を指先で抑えるのである。より精巧なものはその先端に指一本が通る輪状突起を設けてある。これはマンカラ manqalah と言っている。わが国のタカタヌキに当たる。

後半詩行；fa-kam wa-kam の直義は、「さて何とそして何と」。数の多さを強調する感嘆表現。fa-kam wa-kam min tuwwalin までの叙法は次作と同一である。

jammaazi < jammaaz とは「跳躍の上手な、足の速い」。<跳躍>が意味主体なので、ここでは「素早く飛び立とうとする」という情景描写であろう。

tuwwal は獲物の水鳥、「はじめに」のところで述べたように「背高鳴」と同定するのが有力である。

第4詩行：

前半詩行；mughaamirin < mughaamir の直義は、

「死をも省みず、向う見ずに危険を冒す者」。人間が対象であるが、ここでは自分より凶体の大きい獲物に対して向かってゆく、鷹の「大物取り」に適應されている。

yuknaa abaa kuzzaazi の直義は、「震える者の父と綽名されている」。kuzzaazi < kuzzaaz とは、「寒さで震える者」の意味であるが、鷹が身体を膨らませ、羽毛を逆立てて震わせて気合を入れる仕草を言ったもの。この鷹はその仕草が目立つほど多く、人目についての命名となったのであろう。「武者震い」が適訳となろう。

後半詩行；jammu l-wiqaa“i の直義は、「沢山の衝突」。wiqaa“i < wiqaa“ とは waqiy“ah の複数形であり、「突然の出来事、衝突、激突」の意味であり、注釈者 al-Ghazaalii は「寒さに震えながらの水中の niqrah（格闘）」としている。

muwjazi l-‘iyjaazi の直義は、「俊敏の俊敏者」。両語とも語根動詞 wajaza < 簡潔である、迅速である > から派生した第四型派生動詞 awjaza「簡潔に要約する、迅速に処理する・対処する」に由来し、前者 muwjaz は分詞形、後者 ‘iyjaaz は動名詞形である。相手の逃げる動きに対しても、捕える瞬間においても、この上なく迅速な動きを同語反復のような技法で示して見せた。

第5詩行：

前半詩行；awṭana の直義は、「居住地として定める、選ぶ」。ここでの居住地とは愛鷹「武者震い」が敢えて選んだ「狩場」の意味。ahraazi < ahraaz の直義は、「強固な、守りの固い、難攻不落な避難場所」。単数は hirz、これには「護符、お守り」の意味もある。

後半詩行；“allaqa-hu の直義は、「彼を吊り下

げた」。攻めるに難き獲物^{てき}を捕え、鉤爪でしっかり掴み直した後、飛び上がっては水場、川べりから離れ、「武者震い」の好む邪魔の入らぬ平原へと向かう。

jadjadi < jadjad の直義は、「固くて平坦な地」。鷹にとっては、安全で獲物の御し易い場所。biraazi < biraaz の直義は、「樹木の無い駄々広い荒野」。注釈者ガザーリーの注に従って訳したが、後半詩行は内容的にそぐわない。jadjad は「強固な掌持つ鉤爪」の換喩として、biraaz も「広く平らな」で掌を形容するもの、と採りたい。前置詞 /bi-/ は場所も表すが、方向性は表さない。むしろ手段・道具を示すとしたい。「広く平らで強固な掌持つ鉤爪で」とも解釈できるところである。獲物との格闘はこれ以降であることも考慮したい。

第6詩行：

前半詩行；「一裂き、口頭部中央を横切る」が直訳。mashqan < mashq の語根動詞は「衣服を引き裂く」の意味である。衣服とは勿論獲物の身体のこと。多くの翼羽、羽毛が飛び散ったことであろう。

yuqiddu < aqadda とは「長く横に切る、横切る」。thabaja < thabaj とは wast「中央部、真ん中」と同義。ajwaaz は jawzah の複数形で、「項^{うなじ}と頸の間の部分、口から咽喉部」、部位としては表裏の関係になるが、いずれにしてもどんな動物にとっても致命的な急所「頸動脈」の部分である。

後半詩行；「鉤型のもので、出会い頭の一撃」が直訳である。hujnaati < hujnaat は「湾曲したもの、鉤型のもの」で munhaniyaat と同義とされる。単数形は hujnah。鷹の鋭い鉤爪を言ったもので、複数表現であることは

4つのそれぞれの鉤爪が「切っ先」と意識される。sudfati < sudfahとは「偶々起こること、偶然」、ふつうはく出会い頭、離れ際の出来事>をいう。tawxaaz とは、ta“n「一撃、一刺し、一突き」と同義。

第7詩行：

前半詩行；直訳は「靴直し屋の製する錐のよう」に。「突き錐」ashaafi < ashaafii、単数は ishfaa。我々の手許にある普通の錐はミスカブ mithqab (穴=thuqb 開け道具) という。イシュファーは特化した錐であって「皮袋、革靴、革製品など皮革を加工製造するための錐」のこと。複数になっているのは両脚の足指、すなわち鉤爪が8本あり、それぞれが突き錐となっていることを示している。獲物目がけて頭から突進するが、襲う直前には脚を突き出し、突き錐のように鉤爪を相手に突き立てて、一瞬で相手を仕留める。体をかわされても、獲物の一部を切り裂くほどの俊敏さを備えている。

「靴直し屋」の原語は xarraaz。上の「突き錐」とは有縁であり、語根動詞 xaraza とは「皮革に穴をあける」の義であるが、さらに遡ると原義は同じ「穴をあける」であるが、対象は<貝(殻)、(ガラス)玉、(宝)石>である。これは常用語ハラザ xarazah が「貝殻、ビーズ・ガラス玉(とんぼ玉も含めて)、宝石(のネックレス)」であることから推断出来ることである。ハラザに穴をあける「錐」の語ミフラズ mixraz もあるので、その語も用いることが出来たのであるが、韻律の関係で別の同義語を選ばねばならなかったであろう。

後半詩行；直訳は「彼はそれに向かった、単独で、仲間も無く」。

ya“taamu とは語根語 “aymah (最上品) から派生しており、「物色して最上品を選び、それを選び取る」こと。鷹はその優れた眼力から瞬時に、群れの中から最上の獲物 (“aymah) を探し出し、それに向かって飛んで行くこと。jilwaaz とは「兵士、軍人、警吏」。この語は稀語に属し、韻律の関係で選ばれたのであろう。

第8詩行：

前半詩行；直訳は「鷹の息子の切り裂き、及び鷹の製造人」。原文の前半部は qadda bni baazin であり、qadda が動詞ならば以下は目的格 -ba とせねばならないし、たとえそうであっても意味が「鷹の息子を切り裂く」となり、内容が成り立たない。ここは動詞 qadda の動名詞 qaddu の目的格として、状況文としての文体と採っておく。後半部「鷹の製造人」sanii“u baazi とは、鷹としての本来の職能を果たした者、との理解である。

後半詩行；直訳は「何と良き友 欠乏の時に」。i“waaz とは動詞 a“waza の名詞形、「awaz (欠乏、困窮) に貶めること」。ここでは「食糧難の時」と物質的な解釈をしたが、「良き友」の原語 xaliil は「心の底から打ち明けることが出来る友人、親友」の意味であるから、詩人の鬱状態や気の晴れない折を “awaz (欠乏、困窮)、精神的危機と表現したのであり、この愛鷹のセラピー的役割を言っているとも解釈できよう。

第2節 第2詩篇「50羽捕り」

原題：Zurraq sabiih (羽色美しズラック鷹)

これから述べて行く「50羽捕り」は、原題を Zurraq sabiih 「羽色美しズラック鷹」(同書p.651)

と言い、鷹の見立てと水鳥狩を主題として9行詩に纏められている。「50羽捕り」と名付けたのは、最終詩行で「仕留めし獲物何と50羽」とあることから。「50羽捕り」は如何にも大袈裟である。雲雀や雀或いは鶉が獲物ならば可能であろうが、相手は *tuwwal* と呼ばれる青鷺級の大物である。「50羽捕り」を一日だけの出猟、あるいは何日かかけての出来高と見ずに、その年の猟期の総合計と見做せば、ある程度納得のゆくものとなろう。

鷹と隼との違いは、後者が獲物を空中で蹴落とすのに対して、前者は空中では無く、地面や水面近くで獲物を鉤爪で突き刺すように乗り掛かることである。文字通り「鷺掴み」をして仕留めることである。第1詩篇4詩行目「格闘が水中に及ぶも数多たび」とあるように、意外なことであるが、鷹は水を恐れない。むしろ水面での獲物との格闘も、相手が水鳥であれば尚多いのである。水浴びも好み、鷹舎の中には「水盥」がきれいな水と共に用意される。また本篇第4詩行では「快く水吹きを受けし羽毛さらに痩せこけ病気持ちの如」と叙されるように、調教や実猟などで一仕事を終え、鷹舎に戻す前には、入念な手入れが行われ、最後に鷹が好む水をかけてやる。鷹に正面を向かせ、手の先で水をこまめに振り掛けてやる。慣れてくると、鷹匠が

口に含んだ水を吹きかける。鷹は気持ちよさそうにそれを受ける。水にぬれると、膨らんでいた翼羽は肌^{てい}に付着する体になり、貧弱に瘦身に見えてしまう。それを「痩せこけ病気持ちの如」と叙している。元来鷹を太らせると、猟欲が出ない。そのため特に実猟に出る直前にはハングリーな状態を維持し、他方では猟が十分出来る体力も考慮せねばならない。口餌^{くちえ}を引くこともそうだが、その兼ね合いは一重に鷹匠の技量による。痩せているからといって決して病気では無く、わざわざ瘦身にさせているのである、敏捷さを保つためにも。

9行詩の体裁は、8詩行目までは前半詩行・後半詩行に2分割され、末語はすべて脚韻を踏む [-i^{hi}hi]。そして最後の9詩行目は半詩行のみで、その詩行を真ん中に配して終わる。従って9詩行というより、半詩行すべて独立した17詩行のハーイッヤ (Haa'iyyah ハー文字脚韻詩) といった方がよいかもしれない。前作品には脚韻に関して、見事の統一を見ているが、本作品には幾つかの附加母音の逸脱が観られる。末語の脚韻 [-i^{hi}hi] に関して、母音 u だけの交代は認められており、[-uu^{hi}hi] となっているところが、第4詩行後半、第5詩行前・後半、第6詩行前・後半、第8詩行前半、第9詩行、の計7半詩行にその逸脱が観られる。

2-1 邦訳と原綴(ローマナイズ)

- 1 未だ夜も明けやらぬ早朝 優美なズック鷹据えて狩に出る
血統重視する者も納得 雑な血混じらぬ^{じゅん}純粋なる鷹ぞ
qad aghtadii bi-zurraqin sabiih
mahdin li-man yansibu-hu sarihi
- 2 頬広く滑らかにして 明るき色に美しいや増す
非の打ちどころ何処^{いずこ}にあらん 五体また健やか^{すこ}
saltu l-xuduudi waadihin malihi

- wa-laysa maa yughmazu ka-s-shaihi
 3 その脚爪で一度獲物掴みなば 二度とは手放さぬ貪欲さ
 この逸物^{いちもの}売りに出さんとせばそれは高嶺の花とならん
 bi-kaffin dannaanin bi-hi shaihi
 minma shtaraa bi-th-thamani r-rabihi
 4 依然として獵欲すさまじく また瘦身を維持するはさすが
 快く水吹きを受けし羽毛 さらに痩せこけ病氣持ちの様
 fa-lam yazal bi-n-nahmi wa-l-taqdiihi
 wa-rashsha-hu bi-l-maa'i wa-t-talwiihi
 5 時ぞ来たり身を構え 今にも血氣^{はや}逸りて飛び立つ気配
 獲物の声聞き付けては それと鷹匠に知らせてあり
hatta ntawaa illaa janaana r-ruhi
 wa-“arafa s-sawta wa-waḥa l-muuhii
 6 何と なんと多くの水鳥 上を見上げ逃げんとせしか
 されど跳ね飛び逃れようにも益無しその獵欲の余りに激しければ
 fa-kam wa-kam min tuwwalin tamuui
 lam yunji-hi tumuuru-hu fi l-luui
 7 水鳥の何と予期せぬ悲劇か 滑らかで執拗な追跡喰らう
 風もまた鷹の掌中 逆風に徒歩にて逃げ延びんとす
 min falataati ṣalataati shiui
 turjilu-hu r-riiḥu bi-kaffi r-riiḥi
 8 一撃 その鋭き致命的槍で水鳥を突き刺す
 かくて獲物狩る さしたる疲労や苦痛感ずることもなく
 wa-darbatin bi-nayzakin madhruui
 fa-ṣtaada qabla l-‘aini wa-t-tabriiḥi
 9 仕留めし獲物何と50羽 生きながら屠殺^{さば}かれ饗宴^{えん}に供わる
 xamsiina mustahyaa ilaa madhbui

2-2 第2詩篇解説

第1詩行：

前半詩行：「未だ夜も明けやらぬ早朝狩に出る」は、前作品の、やはり同じ maṭla (冒頭句) で説明したように、鷹狩り詩においては常套句であり、グドゥワ ghudwah 「夜明けと日の出との間の時間」を語根とする動

詞 igtadaa である。わが国でも鷹狩をする場合まだ暗いうちから動き出すのは、今も昔も変わらない。

「羽色美しズック鷹据えて」 bi-zurraqin sabiihin、直義は「朝の(ような)ズックで」。この鷹「五十羽捕り」は「羽色美しズック鷹」であった。原語サビーフ sabiih とは、

元来は「朝 sabaah のように爽やかな」であり、「顔立ちの整った」、「器量の良い」、「優雅な」、「羽色美しい」と意味が外延する。「早朝」グドウワ ghudwah と「朝」sabaah との縁語を用いている。

なお「顔立ちの整った」、即ち「朝」のように顔全体が清々^{すがすが}しい場合がサビーフ sabihi と言うのであり、他にももっと特化した<美顔>の表現をアラブは持っている。<目>が美しい顔はハ

ラーワ halaawah と、<鼻>がとりわけ美形な場合ジャマール jamaal、<口・唇>の綺麗な場合はマラーハ malaahah、<舌>が美しい場合はザルフ zarf など。外面からは見えないザルフなど興味深い領域を顔に広げている。

<美顔>だけで無く、身体全体・容姿にまで美形を展開すると、<身体>のプロポーションが素晴らしい場合ラシャーカ rashaaqah、<皮膚・肌>の綺麗な美肌の場合ワダーア wadaa'ah、延長として<心>の美しい場合はラバーカ labaaqah と言って、一連の美的体形の意味場を形作っている。さらに「顔立ちの整った」とされるサビーフ sabihi であるが、これら一連の美的用語の中では<髪の毛>が美しい、とする説があり、これを鷹の羽毛、翼に適用する解釈もある。

後半詩行：「血統重視する者も納得」mahdin li-man yansibu-hu、直義は「彼の由緒求める者に対して血統正しい」。血統高さを重んずるのは、アラブ世界の場合、人間だけで



図3

翼をはばたかせ、口を大きく開き挑みかかるポーズを見せる。何よりもその赤い目をちゃんと見開いてにらまれると何とも妖し気な雰囲気させられる。エジプト(筆者撮影)。

は無い。馬、ラクダ、そしてこの鷹にも平行概念が見られるのは興味深い。

mahdin は「雑な血混じらぬ」。「純粋^{じゅん}なる鷹ぞ」の原語 sariih、直義は「純粋^{じゅん}なる」。sariih および第1詩篇で記述した mahdin は<純粋性>を表す類義語であり、しいて言えば前者は<ミルクや蜂蜜、ワイン>などの液体に対して用いられ、後者は<血筋や血統>に対して用いられる。

第2詩行：

前半詩行：「頬広く滑らかにして」salu l-xuduudi、直義は「頬の平らな」。鷹の観相において大事な部分である。サルト salu とは<jabiin 額・おでこ>などが広く滑らかなことを言う形容詞であり、ここではその部位を<頬>に適応している。

頬(ハッド xadd)は、ここでは複数形フドゥード xuduud が用いられている。両頬ならばハッダイニ xaddaini と双数形の属格を用いるべきであるが、ここでは韻律の関係上複数形を用いざるを得なかったのであろう。

詩人の手に据えたズック鷹「五十羽捕り」は灰色系よりも白系統の目立つものであった、「明るき色に美しいや増す」とある。その原語は *waadihin maliihin*。前詩行の *mahdin・sariih* と同様、やはり類義語を重ねた強調を行っている。前者ワーディフ *waadih* は「白さが明らかな、明白な」であり、後者マーリフ *maliih* は純粋な「塩」を基底にした「塩のように白い」である。

後半詩行：「非の打ちどころ何処^{いずこ}にあらん」
laysa maa yughmazu、直義は「非難されるところは無い」である。注釈者は *maa yu“aabu* (咎められない) とある。*yughmazu* は語根義 *ghamiizah* (悪、欠陥、弱点) の派生動詞 *aghmaza* (中傷する、咎める) の未完了受動形。「五体また健やか^{すこ}か」*ka-s-sahihih* とは「健常者の如くに」が直義である。体型も見た目も、また血統も見事な鷹なのである。

第3詩行：

前半詩行：「その脚爪で」*bi-kaffin* の直義は、「掌で」である。鷹の掌は、猛禽類の代表らしく、獲物を捕らえる武器であるので、他の鳥類より特大の足をしており、また鉤爪も鋭い。鷹狩を発達させた文化圏では特別な名称を付け、細心の注意を払っていた。稿末に補筆として、我が国との関連でそのことについて述べておく。

「一度獲物掴みなば」*bi-hi shahihih* とは脚爪で捉えた「それ(=得た獲物)に貪欲になる・ケチになる」が原義である。この詩行でも「ケチな」という類義語 *shahihih* および次に述べる *dannaanin* を続けることによって、鷹の貪欲さ、猟欲の凄まじさを効果的に表出している。「二度とは手放さぬ貪欲さ」の原語 *dannaanin* は、*daniin* 「けち、物

惜しむするもの」の強調形であり、「けちけち、大ケチ、度ケチ」の義となる。「貪欲さ」はここでは「貪欲^{けち}さ」とルビを附って頂きたい。「一度手に入れたら離さない」というケチの属性を、＜鷹の性格および脚爪＞に流用して猟欲を示したわけである。

後半詩行：「この逸物売りに出さんとせば」の原語は、*minma shtaraa* であって、「この獲物売りに出さんとせば」とも採れ、狩る鷹の方なのか、狩られた獲物の方か解釈の分れるところである。最終詩行で述べられるように、獲物は多数に上り、さほど珍重されたり、高価の対象とも考えられない。やはり狩猟鷹の交換や取引は領主間や支配者同志、鷹匠仲間でもよくあることであるし、「五十羽捕り」のような名鷹の売買や交換であれば「それは高嶺の花とならん」とした方が良いであろう。この原語の *bi-th-thamani rabihih* の直義は「利益大きな値段で」。

第4詩行：

前半詩行：「依然として猟欲すさまじく」*fa-lam yazal bi-n-nahmi* とは「既に何羽か獲物を取ったにもかかわらず」という実績が暗黙のうちに叙されている。「猟欲」の原語 *nahm* とは、「過度の食欲、むさぼるような食欲」が普通の意味で、大食漢はナヒーム *nahiim* といってよく世間で言われることである。注釈によると「鳴き声において、脅しにおいて、追跡において貪欲」なのである。「また痩身を維持するはさすが」の原語は *wa-l-taqdihih*、直訳すれば「そして痩せ細らせること」。猟欲を維持させるには、ある程度ハングリーにさせておかねばならない。ほんの少しの餌で食いつながせ、痩せ細った体型を維持させ、次の獲物に向かわ

せねばならない。

後半詩行：「快く水吹きを受けし羽毛」の原語は wa-rashshi-hi bi-l-maa'i、直訳すれば「そして(鷹匠の)彼(=鷹)に水で持って散布することにも」。狩猟前後、鷹に手入れをする。鷹匠は何か傷ついたところは無いか、傷んだ羽は無いか、入念にチェックし、その手当てをする。その後口に水を含んで鷹の全身に霧吹きをしてやる。鷹は気持ち良さそうにそれを受ける。ここでは狩猟前の準備段階で血氣に逸る鷹の気持ちを和らげる働きがある。「さらに痩せこけ病気持ちの様」wa-t-talwiih、毛を持つ動物達が「ずぶ濡れ」になった様はまことに貧相となる。羽毛持つ鳥類も同じで威容は感じられず痩せこけて、まさしく「尾羽打ち枯らす」さまに見える。ましては狩猟期に入っているのであるから、体重制限もさせられそれがいっそう痩せて見えることになる。一層縮まって、一見病気になるかのごとくとなる。

第5詩行：

前半詩行：「時ぞ来たり身を構え」hatta ntawaa、直義は「折り畳むまで」。鷹は獲物を見つけ襲おうとする時、一旦翼を窄める(intawaa)、そして反動を利用して勢いを付け、いざと飛び立とうとする。「今にも血氣逸りて飛び立つ気配」illaa janaana r-ruhi、直義は「戦いの渦中の狂気としてはさて置き」。janaana<janaan とは「狂気、狂う程に高ぶる心、捕り憑かれて起こる発作」。

後半詩行：「獲物の声聞き付けては」wa-“arafa s-sawta、直義は「そしてその声を知った」。「それと鷹匠に知らせてあり」wa-waha l-muuhii、直義は「そしてそのメッセージ

を送った」。鷹匠は既に動作で気付いており、恐らく声の方角、及び鷹の目の据える方向でさらに確認を取ったのであろう。waha (<waha>) も muuhii も<靈感・啓示>と結びつく意味なので、人鷹一体となっており、相手の意向が以心伝心したことになる。間髪をいれずに鷹は飛び立った。

第6詩行：

前半詩行：「何となんと多くの水鳥」fa-kam wa-kam min tuwwalin、直義は「すると水鳥の中のどの位のそしてどの位が」。前作品とここまでの部分はまったく同一表現。kam が意図的に二度用いられ、その数の多さの強調・感動表現として生かされている。狩られる水鳥は tuwwal「背高鴨」である。「上を見上げ逃げんとせしか」tamuuhi、直義は「空を見上げつつ」。敵機襲来とばかり、警戒が鳥類を襲い、如何逃げ延びるのに対処すべきか、パニックを起こしている。

後半詩行：「されど跳ね飛び逃れようにも益無し」lam yunji-hi tumuuru-hu、直義は「その跳ね上がりは成功しなかった」。時すでに遅く、鷹は間近に迫っていた。トゥームール tumuuru は元来馬などの4足獣の「飛び跳ね」を言い、鳥類のそれはアフアル axyal と言うのであるが、ここでは前者トゥームールを流用した。yunji-hi の動詞 yunji は yunjii の jussive 形である。「その獵欲の余りに激しければ」fi l-luuhi、直義は「その咽喉の渇きにおいて」。咽喉の渇きは、ここでは「水」ではなく、「獲物の血」である。明らかに「血が飲みたい」のである。わが国でも鷹が獲物を捕えると、その報賞としてその胸からマルを抉り出し与える。これを鷹

狩り用語で、マルアゲとかマルヲカフ、マルヲクムとっている。マルとは血がいっぱい詰まった心臓のことである。咽喉の渴きは、そのままの意としても良いが、それほどハングリーな猟欲と解釈することも出来るよう。

第7詩行：

前半詩行：「水鳥の何と予期せぬ悲劇か」min falataati、直義は「失敗、誤り（複数）の中に（あり）」。*falataati* < *falataat* は *faltah* の複数形。*maata faltatan* と用いると、「彼は計算外で死んだ→不慮の死にあった」となる。「滑らかで執拗な追跡喰らう」*salataatu shiihi*、直義は「注意深く活発な者達」、「ただ逃げ惑い右往左往するものばかり」。最後の *shiihi* < *shiih* は *ashyah* の複数形で「用心深い、注意怠り無い(もの)」の意味で、「敵を避け逃げ去るのに最大限意を用いる」ことを指している。*falataat*, *salataat* と同形態話を続けるところは見事である。

後半詩行：「逆風に徒歩にて逃げ延びんとす」*turjilu-hu r-riih*、直義は「風は彼を足で歩いて行かせる」。*turjilu* < *arjala* 「徒歩 (*rijl*) で行かせる」。「風もまた鷹の掌中にあり」*bi-kaffi r-riihi*、直義は「風の掌中でもって」。向かい風ならば、水鳥も自在に動き回れるはずであるが、ただ鷹を見ながらの飛行となるため、ジグザグの飛び方となるため、それを利用できず地面や水面をバタ足で逃げ回る。鷹は向かい風に回らせまいとして、追い風の側から風をもう一つの自分の鉤爪と利用して追い込んで行く。この半詩行でも *riih* を反復させて語句の強意を計っている。

第8詩行：

前半詩行：「一撃 その鋭き致命的槍で水鳥を突き刺す」*wa-darbatin bi-nayzakin madhruuhi*、直義は「そして一撃で、毒盛られた槍で」。機を逃さぬ襲った瞬間描写は見事である。一撃で仕留めてしまった。*nayzakin* < *nayzak* とは長槍ラムフ *ramh* に対して、「短い槍 *ramh qashiir*」のこと。鷹の鉤爪を言い当て妙である。複数形は *nayaazik*。この動詞 *nazaka* には「槍 (*nayzak*) で突き刺す」から外延して「他人を中傷する」の意味を実現している。*madhruuhi* < *madhruuh* とは「毒を盛られた」の意味で、「鋭い」の換喩である。この語根は毒の原料であるズッラーフ *dhurraah* である。少し長くなるがこの毒について説明しておこう：

ズッラーフとは、ダミーリーの『動物誌』(I 632)によれば、虫のハンミョウの一でカンタリス *cantharis* が学名で、俗名は「スペイン蠅 *spanishfly* = ヨーロッパミドリゲンセイ」とも呼ばれる。干して粉末にして毒として用いられることで知られる。その毒性ゆえにハビース (*xabiith* 忌まわしい、汚らしい) として扱われる。因みにハビースの典型は、「尿と糞便」であり、アフバサーニ (*axbathaani* 最も忌むべき二つのもの) とされる。ズッラーフはそれゆえイスラム法ではハラーム(不可食)である。一方、何処の世界でもそうであるが、毒と薬とは紙一重である。薬用、薬膳であるならば許容される。発泡剤や水泡膏として皮膚癌 (*sarataan*)、疥癬 (*jarab*)、悪性白癬 (*qawaabii*)、腫れもの・腫瘍 (*awraam*) に有効とされた。またズッラーフを細かく粉末にして患部に塗ると、虱 (*qaml*) の除去が出

来る。同じく髪の毛に対して、オリーブオイルと一緒に煮詰めた油を頭髮に塗ると脱毛症 (daa' l-tha'lab) に効果あり、とされている。またごく少量は媚薬として、またごくごく少量をレンズ豆と混ぜ合わせて食べると、狂犬病や高熱の薬剤となることが知られる。その一部を赤色の小袋 (xirqah) に入れて吊り下げるか、体の一部に触れた形で携帯すると猩紅熱などの熱病 (humaa) に特別な効果があるとされる。ズラーフの他に、zurruuh, zuraah, dharuuh 他多くの方名を持つ。

後半詩行：「かくて獲物狩るさしたる疲労や苦痛感ずることなく」fa-staada qabla l-aini wa-t-tabriih, 直義は「そして疲れや傷みの前に狩をした」。「五十羽捕り」が狩の逸物たることは、どれだけ獲物を捕獲しても「疲れや傷み」を感じないところに窺える。aini < ain は「疲労、疲れ、消耗」であり、現代語の ta'ab と同義。tabriih < tabriih は「苦しめる、悩ます」barraha の動名詞。

第9詩行：

この詩行は前半詩行と後半詩行とに分かれてはならず、半詩行のみでそれを真ん中に配する。形式を重んずるアラビア詩においては最終詩行は、しばしばこの詩形が採られる。

「仕留めし獲物何と50羽」xamsiina、直義は「50」。50羽は例えばヒバリとかウズラでは大成果として可能であろうが、サギ類となると不可能に近い。鷹の狩猟能力を誇張して最大限発揮した表現と見做してよからう。「生きながら屠殺かれ饗宴に供わる」mustahyaa ilaa madhbuuh, 直義は「生きていて屠殺されることに」。mustahyaa とは「屠

殺される前の、生きている状態と見做されるもの」。狩猟の獲物は「死体であっても、例外的に食用が可能である」。

補足：鷹の脚について

第1詩篇第1詩行「手に据えはは鉤爪鋭きズラク」、第5詩行「掴み上げては運び去る」、第6詩行「電光石火の早業 獲物の急所横切る 狙い違わぬ曲がり刃の鋭き一閃」、第7詩行「靴直し屋の研ぎ澄まされた突き錐さらがらに」。

第2詩篇では第3詩行に「その脚爪で一度獲物掴みなば 二度とは手放さぬ食欲さ この一物売りに出さんとせばそれは高嶺の花とならん」、及び第8詩行では「一撃 その鋭き致命的槍で水鳥を突き刺す」。また1993年に紹介した「目元涼しきズラク鷹」第8詩行では「武器となる鉤爪の鋭く 襲い、獲物の肉ぞ引き裂く」とあった。タカの鉤爪、それは他の鳥類のいずれとも異なり、刃・剣・槍、突き錐とも本稿では例えられている。

ここで鷹の脚、すなわち「趾」のことについて述べておこう。飛べない駝鳥類は別にして、鳥類の趾は4本が基本である。鷹の趾爪は、わが国の鷹狩り用語では「趾爪(シツメ)」と呼び習わされて来たので、以降この用語を使って説明して行こう。鷹の場合、趾爪4本のうち3本は前に伸び、もう1本は後ろに湾曲する。

後ろの鉤爪は太く力強い。人間の拇指に当たり、力が最も入る指である。この趾爪はわが国では伝統的に「懸爪(カケツメ)」とっている。獲物をまずこの趾爪で「引っ懸けて」捉えるからであろう。他にも二つ「モキカケ」と「餌ハミ」とがある。前者は「挽ぎ懸け」、ないし「掘ぎ懸け」で、獲物を食べる時、食べたい部分をこの趾爪

で押さえつけ、嘴でもぎり取る、千切り離すところから由来している。後者も同様な発想から「餌食み」の漢字が当たろう。アラビア語では<後>と見ずに<外>と見做し、「外側の趾爪」ミフラブ・ハーリジー al-mixlab al-xaarijii と言っている。趾爪ミフラブ (mixrab pl.maxaarib) は語根動詞 xaraba「ひつつかむ、わしづかみにする、負傷させる」から由来する。いずれの意味も<鉤爪>が有意に働いていることが読み取ることができよう。大鷲の中でもウカーブ・ムフリバ“uqaab muxribah”と呼ばれている類がある。「鉤爪鋭き大鷲」であって、ただでさえ鋭い鉤爪を持つ鷲なのに、ことさら強調する程に、見た目にも鋭いのであろう。英語では一般には hind toe または first toe と言うが、特称 hallex がある。この用語は手の親指が thumb に対して、「足の親指」の語義を担い、鳥類の場合は「趾母」として用いられている。

前の趾爪3本のうち、体に一番近い趾爪は、わが国では「内爪(うちづめ)」と言っている。「打爪」とも表記されるが、それは<内側>と言う意味と<打撃を与える>と言う意味からである。外国でも数える順序は同じで、後ろ・外側の^{おや}拇指を第1指とし、前方の内側、人差し指から「第2指」とする。英語では secand toe ないし inner toe であり、アラビア語ではミフラブ・サーニー al-mixlab al-thaanii (第2趾爪) と言っている。

中指に当たる趾爪は、わが国では「鳥搦(とりからみ)」と言っている。この趾爪で<搦め捕る>からであろう。搦め<捕る>ところから「取手(とりて)」とも称する。また「鳥据(トスエ、トリスエ、トツスエ)」との別名も持つが、これは4つの趾爪の中でも、最も長大で、鷹匠が腕に鷹を据えた時、この趾爪を頼りとする

ところからであろう。アラビア語ではミフラブ・サーリス al-mixlab al-thaalith と言っている「第3趾爪」の意味である。英語では middle toe または third toe である。

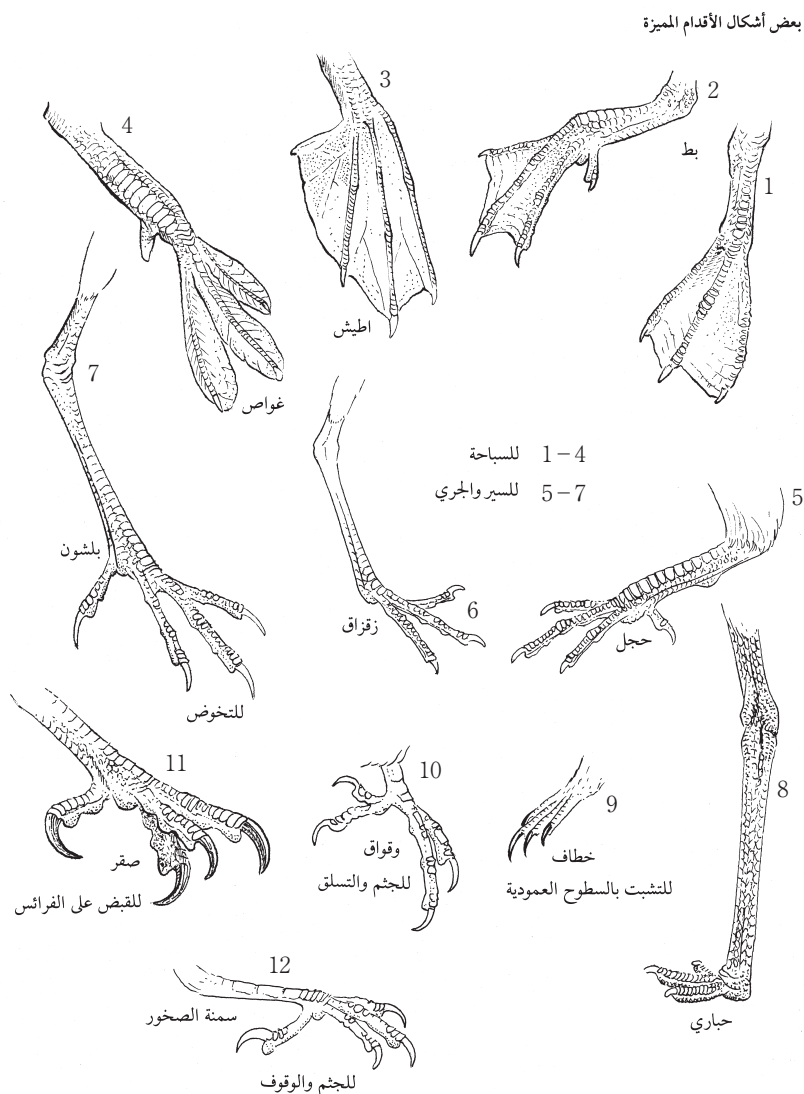
薬指ないし小指は、わが国では「帰籠・反子(かえるこ)」と言っている。この趾爪は獲物を捕えた時、最後に瞬動するもので、押さえつけ包み込むように内側に反りかえるからであろう。他にも同じ発想から「押添(ヲヒソ、ヲヒソエ)」とも称する。アラビア語では「第4趾爪」の意味でミフラブ・ラービウ al-mixlab al-raabi“ 英語では outer toe とか fourth toe と言っている。

わが国では趾爪に対して、趾の表裏にも特称がある。いわゆる甲の部分は「蜘蛛(クモテ)」と言っている。甲の部分も含めて脚、附蹠はうろこ状の、あるいは網状の皮膚に包まれている。これを蜘蛛の糸に見立てての謂い方をしたのであろう。また魚の鱗に見立てて「鱗火(リンヒ)」とも言った。さらには「カンキ」ともいったが、これは附蹠部を^{かんき}雁木紋様にも見立てたのであろう、^{ほう}鰭の字を当てられることもある。この「蜘蛛」の模様は、人間の指紋と同様、個体によって全部異なっている。

趾爪の裏であるが、鷹・鷲の類には皺状の肉付きがあり、特徴があるだけにさまざまな呼称がある。先ず、魚の目、^{いぼ}疣の連続と見立てられて、「血疣(チイホ)」と呼ばれて、^{せき}跖の字が充てられたりする。疣というより、瘤の様ということで「瘤状突起」、あるいは掴むのに滑らないように摩擦が合うよう発達したものだとして「掴み突起」とも言われる。あるいは鬼のように恐ろしさと力が合って、^{でわ}軟な獲物ならば握り潰してしまう、^{ひし}拉いでしまうところから「鬼平(オニヒシキ)」とも言っている。さらに趾の甲が「蜘蛛手」であるのに合わせて「蜘蛛尻(クモシリ)」とも

称した。なおアラブ世界では「鉤爪」はブルスン (burthun pl.baraathin) とも言う。そして「鉤爪」を持っていても、それを武器とする猛禽類・猛

獣類のフラブに対して、武器としない「鉤爪」はズフル (zufr pl.azfaar) と言って明別している。「引っ搔く」を語根義とする。



- | | |
|--------------------|------------------------------|
| 1-2 batt (アヒル) | 7 balashuun (アオサギ) |
| 3 atyash (カツオドリ) | 8 hubaaraa (ノガン) |
| 4 ghawwaaq (カイツブリ) | 9 xuttaaf (ツバメ) |
| 5 hajal (シャコ キジ) | 10 waqwaaq (カッコウ) |
| 6 zaqzaaq (タゲリ) | 11 saqr (セーカーハヤブサ) |
| | 12 samnah al-suxuur (イソヒヨドリ) |